

国民国家（批判）論とは何だったのか

——《文化複合》理論構築のための断章——

小野寺 真人

[Article]
Masato Onodera
What was Nation-State(Critical)
Theory? : A Fragment for Construction
of "Cultural Composite" Theory
(Received 19 December 2020)

A Noon of Liberal Arts, No. 11, 2022

プロブレマティク 問題の所在

本稿の冒頭が「筆者の体験談」から始まることを、賢明なる読者諸氏にはご寛恕願いたい。

歴史研究者たちが集まるとある小さな研究会が終わり、いつものように酒宴が始まった時のことであった。日本人研究者が、在日朝鮮人研究者にこう問うた。「在日朝鮮人運動を研究対象にするのはよいけど、民族なんて所詮は《幻想の共同体》に過ぎないのだから、あなたはそのことを批判的に考察しなければならないのではないのか？」と。

自身も在日朝鮮人運動に深くコミットしている在日朝鮮人研究者はしばし沈黙したのち、怒りを露わにしはじめた。それはそうだろう。この列島社会において圧倒的多数を占め、支配者としての特権

を独占する「中心部日本国民」^{★1}が、エスニックマイノリティであり、この国の公共圏から長く追放され続けてきた「半難民」^{★2}である在日朝鮮人にこのような問いを発することは、自身のポジショナリティを問うこともない、いわばポリテイカルコレクトネスを欠いた問いとしか、筆者の目には映らなかった。研究者同士であればこそ、生じたやり取りであったともいえるし、またそうであるがゆえにこそ、前者の発言は厳しく指弾されなければならない。

この体験が、本稿を執筆する大きな初期衝動となっている。それはすなわち、このようなことだ。一九九〇年代において学界を席巻した西川長夫による国民国家（批判）論をどのように批判的に総括し、多様なルーツを持つもの同士がこの日本社会と世界全体で共生することに向けての文化理論をどのように構成していくのか、これである。

残念なことに、学界を席巻していた国民国家（批判）論への、批

判的かつ反省的な総括はまだなされていない。むしろ、総括がなく、学界は「漸進」しているようにすら、筆者の目には映る。^{★3}

民族、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、地域、国家……たった一人の個人には重層的なアイデンティティが存在している、とされる。^{★4} これらを総て西川のように《私文化》とするのであれば、それは結局、個々人の集合からなる《共同体》を暴力的に解体し、個人を《アトム化された孤人》へと追いやるだけなのではないだろうか。しかも、その結果として《幻想の共同体》とされる国家は、ますますその《アトム化された孤人の群れ》に対して、容赦なく権力の実体的暴威を振るうであろうことは言を俟たない。

本稿は、個人の内部における《文化複合》という新しい概念規定から、世界規模での民衆連帯による大きな共同体の現出に向けて、新たな文化理論を思想史と文化実践の中に見出していくものである。

そうした思索を進めていく上で、大いに参考になるのは、マルクス主義国家論者である大藪龍介の一連の仕事である。大藪によれば、スターリンとアルチュセールは国家を階級支配の道具であると見做し、国家＝暴力装置として規定するものでしかなかった。^{★5} だとすれば、アルチュセールの翻訳者である西川長夫の文化理論にも、そうした思考／志向の痕跡が残存していても、なんら不思議ではない。しかし、これはまだあくまで「仮説」の域を出ないものである。「仮説」を本格的に論証するために、これから本格的な思索の旅に出よう。

第一章 西川長夫の「私の文化」理論の構造的欠損

では、まず西川の代表作と誰もが目して止まない『増補 国境の越え方 国民国家論序説』^{★6}の簡単な解析から始めてみたい。

西川は「国民」と「民族」を切り離して、次のように述べる。

「国民」にはその容器ともいふべき国家があり、領域を区切る国境があるが、「民族」の境界を定めるものは想像力以外に何も無い：（中略）：民族は文化的シンボルによつて統合された政治的共同体であり、政治権力によつて操作される政治的虚構である。^{★7}

ここにおいて、西川は「国民」には「容器」として「国家」や「国境」が存在するが、「民族」は「文化的シンボル」によつて統合された政治的共同体」に過ぎず、実体的な「国民」とは違い、「政治的虚構」と断言する。

では、その西川は文化をどのようなものとして捉えているのだろうか。端的に表している一文を引用する。

文化の定義が、本質的な部分として、文化を維持する特定の社会あるいは集団の同一性を前提とするならば、国民国家の

枠から解放された文化の主体は、広く拡散する。個人、家庭、職場、学校、地域社会、国家（形を変えた）、人類（世界）、等々、大小さまざまな集団を主体としてさまざまな文化の複合的な構造のなかに置かれたとき、文化は個別性や普遍性という二つの相対する方向性をいつそうあらわにするにちがいない。^{★8}

西川は文化は「広く拡散」し、その範囲は時には「人類（世界）」にまで及ぶと論じる。そこにおいて文化は「個別性」と「普遍性」という「二つの相対する方向性」をあらわにしていける可能性については否定しない。

しかし、結局、「民族」という「共同体」を「虚構」と断じてしまう西川の議論から忘れてはならないことは、しばしば「単一民族国家」とされ、そのような「虚構」の「共同体」であるはずの日本が、在日朝鮮人を具体的に公共圏から追放し続けているという厳然たる事実である。この大きな問題に対しては、西川理論では応答不可能に陥るしかないだろう。

西川理論の最大の欠損は、アルチュセールのイデオロギー装置論を抽出し、「文化」を「虚構」として成立させるための「装置」としてのみ描き出してしまったことにある。そして、極限にまでアトム化された孤人の群れは、国家が煽る分断と対立にはまったく対抗できない。オルタナティブな文化理論が要請される理由は、絶対的にこの点に所在している。西川には「イデオロギー暴露」という方法しかなく、それは本当の意味でのオルタナティブな連帯を可能に

する理論的根拠をまったく提示できなかった。いくら「世界」と「文化」との関係を「相対する方向性をいつそうあらわにするにちがいない」と申し開きをしても、どのようなものがそれに当たるのかを明らかにしない限り、世界史の時計を前に進めることは不可能なばかりか、眼前の日本国内の問題にすら応答できないのである。

もつとも、満洲からの引き揚げの際に難民となることを強いられ、国家に絶望したという奇烈な原体験をもつ西川そのひとの功罪はともかくとしても、そのフォロワーたちである国民国家（批判）論者たちはありとあらゆる文化装置が国民統合のための装置であることをつづぎに「実証」してしまった。それでは、どこにも国家に対峙するための抵抗拠点を見出すことができず、かえってそうした議論の仕方では国民国家を批判的に乗り越えることは困難になってしまったことは否めないだろう。そして、西川国民国家（批判）論の問題点について、更に輪をかけて重要なことは、次の点にこそある。西川国民国家（批判）論は、「文化的本質」を獲得することによってある種の民族共同体を形成して日本社会におけるマジョリティと文化的にも政治的にも対抗しようとするエスニックマイノリティの実践を頭ごなしに否定し、かたや日本社会におけるエスニックマジョリティによる文化統合と、かたや文化理論とで挟撃しようとする、極めて悪質かつ危険な思想にしかならないということ、この一点に尽きよう。論点を完全に先取りしてしまうことになるが、西川国民国家（批判）論の理論的・実践的限界はとつこの間に枯れ果てているといつてよいのである。

国民国家（批判）論の台頭、ちょうどそれは、一九八〇〜九〇年代に東欧社会主義圏諸国が崩壊した時のことであり、それまでの主要な歴史／実践理論としてのマルクス主義理論がそれを契機に一気に凋落した時と同期するものである。それまでのグラントセオリを喪失した歴史学界にとつては、そうした西川のフォロワーたちの仕事が一彼ら／彼女らの意識的にはどうであったかはさておき——根源的に批判的かつ創造的な仕事であったかどうかは、筆者には大きな疑問が残る。^{★9}であるとするならば、その源流は一体どこにあり、どのように克服すべきなのか。そのために、われわれの思索は次にアルチュセールの仕事に焦点を移し、若干の迂回路を経ることとなる。

第二章 アルチュセール「イデオロギー装置論」 についての一試論

本章ではアルチュセールの『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』^{★10}を分析の俎上に載せる。

アルチュセールはマルクスを引き合いに出しつつ、その国家理論の要点を次のように纏める。

- 1 / 国家とは〈国家（の抑圧）装置〉である。
- 2 / 〈国家権力〉と〈国家装置〉とを区別しなければならない。
- 3 / 階級闘争の目標は〈国家権力〉にかかわっており、したがっ

てその結果、〈国家権力〉を掌握する諸階級（あるいは諸階級の、または階級諸分派の同盟）による、彼らの階級的諸目標に応じた〈国家装置〉の利用にかかわっている。

4 / プロレタリアートは現存の国家装置を解体するために〈国家権力〉を奪取し、第一段階、つまりプロレタリアート独裁の段階でそれを全く異なるプロレタリア国家装置に置き換え、次に続く諸段階において、より根本的な過程、つまり国家の解体の過程（国家権力とあらゆる〈国家装置〉の終焉）を實現しなければならぬ。^{★11}

これら四つのテーゼが、本質的にマルクス主義的であるかどうかはここでは問わないが、本稿において最大級に重要な点は、アルチュセールが掲げる究極的な目標が「国家の解体」、すなわち「国家権力とあらゆる〈国家装置〉の終焉を實現」する、というところにあることである。

では、いかなる方法をもってアルチュセールはそれを成し遂げようとするのであろうか。アルチュセールが列挙する〈国家のイデオロギー諸装置〉とは、これらである。

- 1 / 〈学校装置〉
- 2 / 〈家族装置〉
- 3 / 〈宗教装置〉
- 4 / 政治〈装置〉

5 / 組合〈装置〉

6 / 〈情報装置〉

7 / 〈出版・放送装置〉

8 / 〈文化装置〉^{★12}

ここまで列挙するアルチュセールからすれば、ありとあらゆる〈装置〉が〈国家のイデオロギー装置〉としてあらかじめ準備されていることが確認できよう。つまり、アルチュセールによれば、プロレタリアートはつねに、すでにこうした〈装置〉の包囲網の中にあるのだ。

そのことは、アルチュセールの次の一言に縮約されている。

〈国家の抑圧装置〉は優越的なしかたで（物理的にせよ、そうでないにせよ）抑圧によって「機能する」。〈国家のイデオロギー諸装置〉は優越的なしかたでイデオロギーによって機能する。^{★13}

賢明なる読者諸氏ならもうお気付きかもしれないが、ありとあらゆる〈国家のイデオロギー諸装置〉が「優越的なしかた」で「機能するもの」である以上、アルチュセール国家論は、イデオロギー暴露には成功していても、それらのイデオロギー諸装置による包囲網をどう突破していくかという根本的な命題には応答不能であるといわざるをえない。強いていうならば直接的な〈装置〉の破壊、すなわ

ち物理的な「暴力革命」くらいしか、筆者には思いつかない。

筆者が本稿冒頭で述べた「仮説」はここにおいて論証されるといえよう。西川にせよアルチュセールにせよ、その仕事は、どのつまりは単なるイデオロギー暴露であり、それ以上でもそれ以下でもない。オルタナティブを提示できないという点においても同様である。両者に共通する思考／志向は次のことしか帰結できない。すなわち、「イデオロギー暴露では用意周到に張り巡らされた装置によって護られている国家を乗り越えることはできない」、これである。

第三章 クレオールという挑戦

ここまでのわれわれの考察は次のように要約できる。すなわち、イデオロギー暴露だけでは国家を乗り越えることは不可能である、ということである。そうであるならば、国家を乗り越え、世界大の民衆連帯を可能にする文化理論、本稿でいうところの《文化複合》理論はどのようにして導出されるべきなのか。そのヒントをカルチュラル・スタディーズ、就中、クレオール研究に求めてみたい。

手元に一冊の書物がある。『複数文化』^{★14}のために、ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』というものである。この書物のマニフェストである「はじめに——〈複数文化〉への誘い」に〈複数文化〉という概念が凝集している。少々長い引用になるが、読者諸氏にはご寛恕願いたい。

「文化にはそれぞれ固有の伝統と価値がある。そうだとすれば、異なった文化のあり方を頭から拒んだり蔑んだりせず、平和的な共存をめざして互いの文化の固有性を尊重すべきだろう。」——強弱の置き方に多少の違いはあるにせよ、このような主張は、現在かなり広い範囲に浸透しているようだ。「文化多元主義」とも「文化相對主義」とも呼ばれるこの言説は、熾烈な民族紛争がまさにいま各地で噴出しつつあるだけに、いつそう説得的な意見として多くの人に受け止められているのだろう：（中略）：しかし、ことがらはそう単純ではない。

とりわけ、ここで自明視されている文化の固有性という観念については、慎重に考える必要があるだろう。一般にある文化が固有性を保持していると言う場合、その文化の内側にはいかなる夾雑物も含まれていないことが、暗黙のうちに想定されている。つまり純粋な均質性を保っているということ、これが文化の固有性をかたちづくる条件にほかならない、とみなされるわけだ。だが私たちは実際には、単一の純粋な文化の担い手として日々生きていくわけではない。むしろ私たちを取り囲んでいるのは、複数の文化どうしが触れあい、相互の内側へと嵌入しながら、自他の境界線をたえず引き直してゆくという事態^{★15}であろう。

ここでは文化は「夾雑物」の入ったものとして前提され、「複数の文化どうしが触れあい、相互の内側へと嵌入」し「自他の境界線を

たえず引き直してゆく」ものとして、その複数性が語られる。しかし、ここで問題となるのは、自他の境界線とは何か、という問題である。本書が語るように、「文化多元主義」や「文化相對主義」は「熾烈な民族紛争」という悲惨な状況には一定の有効性を有している。

だが、逆にいえば、複数文化という概念に内包される「自他の境界線」とは、異民族同士のそれが暗黙のうちに前提されているともいえよう。「単一の純粋な文化の担い手として日々生きていくわけではない」ことは、どのような実践の地平を切り開いていくべきなのだろうか。

本稿の立場からすれば、静態的な民族共同体を解体すればよいというものでもないが、だからといって、それらをただ単に温存するだけでも充分ではない。では、そうした問題を超越して世界大の民衆連帯を可能にする動態的な《文化複合》理論とは何か。今までの考察も含めて、結語としてそれを論述することとしよう。

結語——民衆連帯のための《文化複合》理論

さあ、世界史の時計を進めるための試論を展開して、本稿の結語としよう。

個々人がそれぞれの多様性を互いに認め合い、共生が可能になる社会、あるいは世界において必要な文化理論とは何か。それを求めて、筆者は過去の歴史ではなく、現在に眼差しを向けた。そしてそこから得られた知見を《文化複合》理論と名付けることとする。

例えば、ドゥルーズIIガタリはこういう。

われわれは『アンチ・オイディプス』を二人で書いた。二人それぞれが数人だったのだから、それだけでも多数になっていた……(中略)……われわれはもはやわれわれ自身ではない。それぞれが自分なりの同志と知り合うことになる。われわれは助けられ、吸い込まれ、多数化されたのである。^{★16}

ドゥルーズIIガタリという、さまざまな機械によって構成された個人の連結は、必然的に多数性を惹起する。ここから理解出来ることは、個人とは、つねにすでに複数の機械によって構成された存在に他ならないということである。であるならば、個人に内在する機械による複数性を、文化理論としてさらなる外部へと接続していくことは不可能なのであるか。

その問いに応答するために、ここでたとえをひとつ出そう。在日朝鮮人であれば、日本の文化にも馴染んでいるし、朝鮮学校や韓国学校、民族学級などに通ってさえいれば、祖国の文化にも精通している。彼ら彼女らは、日本と朝鮮半島とを繋ぐ媒介項となりえる。

そこで本稿の主題にうつつつけの人物がいる。演劇人であり表現者であるきむ・きがんに例に取りたい。彼女は日本生まれの在日朝鮮人だが、いわゆる民族学校に通った経験がある訳ではない。しかし、自身の民族性に力点を置いたひとり芝居「在日バイタルチェック」を精力的に公演しつつも、次のように述べる。「民衆、労働者

の一人という視点からは離れたくない」と。きむ・きがんは、民族だけには特化せずに、沖縄辺野古基地反対闘争を扱った「想son」や、野宿労働者をテーマにした「民衆劇金ヶ崎」おっちゃん達の間宣言」、部落差別問題をテーマにした「人の値打ち」など、さまざまな劇にこれまで挑戦してきた。きむ・きがんには「命について、普遍的な問題をやっていきたい」という強い思いがあるのである。^{★17}

そんな、きむ・きがんは日本国憲法九条を次のように読み替える。

日本国憲法

第二章 戦争の放棄

第九条 日本市民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動による戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。^{★18}

こうして、きむ・きがんは、国民という概念を打破するための手段として、「国民 nation」ではなく「市民 citizen」という概念を対置させる。それは、朝鮮半島にそのルーツを持ちながらも、日本に暮らすものとしてこの列島社会(とこの世界)どのように責任を持つか、ということについて、この国この世界の人びとに表現者として訴えることを止めない、きむ・きがん独創のものにはかならない。

周知の通り、日本国憲法の英語版原文で規定範囲は「国民 na-

「in」ではなく、「人びとpeople」であった。それと軌を同一にするきむ・きがんの思考／志向は、そもそも日本国憲法が持っている世界史的意義や潜勢力を現時点で最大限に活性化させるものともなっている。上記のとおり、きむ・きがんは朝鮮半島にルーツを持ちつつ、日本社会で生まれ育ち、またその興味関心の領域は民衆の闘争と連帯とにある。彼女の中にはつねに、すでに、《文化複合》が内在しているのである。こうした複数性を生きること、一にして多であり、多にして一である個人の中には、別の個人と連帯するための歯車が内包されている。

それは、その時々々の局面や場面によって、ジェンダーや階級、民族として顕現する。しかし、ドゥルーズⅡガタリのように個人が最初から複数であることを文化理論に応用することが許容されるのであれば、《文化複合》を生きているのは何もきむ・きがんのような特殊な例に限らず、誰しもがそうであるという普遍的事実といえよう。ある地域や国家にさまざまな文化が混在しているのではない。ひとりの人間の中にさまざまな文化が複合しているのだ。

《文化複合》は人びとを孤人の群れに解体することはない。むしろ、一人ひとりの中にあるモザイク状の《文化複合》は次のことを導出する。すなわち、《文化複合》とは、つねに、すでにさまざまな複数性を持つ個人と個人とが連帯を可能にする歯車にはかならない、ということである。ここにおいてこそ、人びとは、誰の敵にもなれると同時に、誰の味方にもなりえるのである。これこそが、世界(史)的な民衆連帯を可能にする結節点を力強く構成する《文化複合》理

論の潜勢力にほかならない。

このようにして、《文化複合》につねに、すでに内包されている潜勢力を現代社会に理論として確立すること、これが本稿の究極的かつ最終的な狙いであった。その狙いを成功裏に終えた本稿の短小的探索は、ここをもってその終着点としよう。

誰にでも、《文化複合》は内在しているのだから、連帯への歯車はつねに、すでに備わっているのである。そしてそれはいつの日か、一にして多、多にして一の世界を可能にするだろう。

人びとよ、弾けて混ざれ！

★1 この概念は徐京植『半難民の位置から——戦後責任論争と在日朝鮮人』、影書房、二〇〇二年から直接的な示唆を得ている。

★2 同前。

★3 小林啓治「国家論をひらく——軍事・戦争、国際関係を組み込んだ関係論へ——」、『歴史評論』八三八号、二〇二〇年二月が、こうした問題意識に基づいた議論を若干展開させているが、あくまで国家論を語る上で俎上に載せられたものであり、文化論として展開される本稿とは志向を根本的に異にしている。

★4 一般的なアイデンティティ論は「重層」という概念を使うが、本稿では敢えてその概念を避けることにする。なぜならば、「重層」とは層の積み重ねに他ならず、どうしても垂直概念、俗言すれば「上下関係」を持ち込みかねないからである。

- ★5 大藪龍介『現代の国家論』、世界書院、一九八九年、二二三頁を参照のこと。
- ★6 平凡社、二〇〇一年。
- ★7 同書二八六〜七頁。
- ★8 前掲書二七三〜四頁。
- ★9 これは個人的な雑感に過ぎないが、西川の無数のフォロワーたちの仕事は、グランドセオリ―喪失後の歴史学において、研究業績量産のための格好の枠組みでしかなかったのではないだろうか。業績数至上主義の負の側面がここに顕現していると筆者は考える。
- ★10 西川長夫・伊吹浩一・大中一彌・今野晃・山家歩訳、平凡社、二〇〇五年。
- ★11 同書一九九頁。
- ★12 前掲書二二二頁。
- ★13 前掲書一四四頁。
- ★14 複数文化研究会編、人文書院、一九九八年。
- ★15 同書一頁。
- ★16 G・ドウルーズ、F・ガタリ（宇野邦一＋小沢秋広＋田中敏彦＋豊崎光一＋宮林寛＋守中高明訳）『千のプラト― 上 資本主義と分裂症』、河出書房新社、二〇一〇年、一五頁。
- ★17 『月刊イオ』二〇一八年二月号、朝鮮新報社、二〇一八年二月一日、三三三頁。
- ★18 きむ・きがんが主宰する『劇団（石）トル』の公式グッズである「憲法Tシャツ」および「憲法手ぬぐい」からの引用となる。

